

CNS・CNから学ぶエビデンス

ICUにおけるせん妄(?)のエビデンス

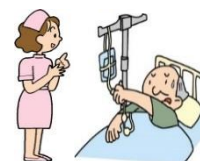
急性・重症患者看護専門看護師 伊藤 真理

皆さんもご存じのように、ICU患者が幻覚や幻聴などの非現実体験や被害感、記憶の欠落を経験(以下、非現実的体験)することは珍しくありません。医療者はそれを「せん妄」と理解し、**その患者のその後**を気にかけることは少なかったと思います。しかし近年、ICU患者が、退院して1年以上経過した後もその非現実的体験にとらわれる、ICUで見た映像や音の残存に悩まされることなどが分ってきました¹⁾。これは、Post Intensive Care Syndromeの1つの症状として注目され、本邦でもICU看護師が患者の退室後に後方病棟を訪問し、ICUでの非現実的体験の混乱や不安を緩和するというプログラムも開発されています²⁾。

もう一つ興味深い研究報告があります。ICU患者が体験する非現実的体験が既存のせん妄ツールでは捉えることが困難だという報告です³⁾。ICUでよく使用するCAM-ICUとICDSCが両方陰性にもかかわらず非現実的な体験をしている患者が、非現実的体験者26名中20名という結果です。

今後は、ICU患者の主観的体験を簡便に評価できるツールの開発や活用が重要な課題です。ICU退室患者の主観的体験に関心を寄せ、耳を傾けることが大事な看護の一步だと考えます。

- 1) 木下佳子, 井上智子. 集中治療室入室体験が退院後の生活にもたらす影響と看護支援に関する研究. 日本クリティカルケア看護学会誌. 2006; 2 (2): 35-44.
- 2) 木下佳子. 記憶のゆがみをもつICU退室後患者への看護支援プログラム開発とその有用性に関する研究. 日本クリティカルケア看護学会誌. 2011; 7 (1): 20-35.
- 3) 善村夏代, 白浜伴子, 米山多美子他. ICU入室患者が体験する精神的混乱はせん妄で説明できるか. 日本クリティカルケア看護学会誌. 2010; 6 (1): 128.



透析を予防するためには早期からの患者支援が重要です

糖尿病看護認定看護師 大橋 睦子

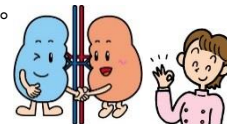
糖尿病治療の目標は合併症の発症予防と進展阻止です。

中でも3大合併症の一つである腎症は、進行程度によって1期から5期までに分類されています。5期に進行してしまうと透析に至り、患者のQOLや生命予後を悪化させてしまいます。糖尿病腎症は世界的に末期腎不全の主原因で、我が国でも1998年以降一貫して新規透析導入の原因疾患の第1位となっています。1999年に報告されたSteno type 2 randomised study¹⁾では、厳格な血糖・血圧の管理に加えてチームでライフスタイルの介入を行った集約治療群では腎症の進展が抑制され、早期から血糖・血圧・脂質のトータルケアを行う重要性が示されました。

我が国では、平成24年の診療報酬改訂でチームで指導を行った場合「糖尿病透析予防指導管理料」が算定されるようになり、当院でも平成25年度末までに63名の方に介入を行っています。そのうち病期の改善を認めた方は17名おり、うち2期→1期が13名でした。残念ながら4期の方の改善はなく、このことから早期に介入を開始することの重要性が示唆されています。

糖尿病腎症は、病期に応じて治療方針が異なるため、病期を正しく評価し、治療方針に基づいた自己管理を継続することが重要です。各職種が共通知識を持ってチームで介入を行い、特に看護師は連携が円滑に行えるよう調整役も担いながら、早期から患者の状況に応じた自己管理行動獲得への支援を行っていくことが求められています。

- 1) Gaede P, Vedel P, Parving HH, Pedersen O: Intensified multifactorial intervention in patients with type 2 diabetes mellitus and microalbuminuria: the Steno type 2 randomised study. Lancet 1999; 353: 617-622.



大学から学ぶエビデンス

いのちと暮らしを護るために

保健学研究科看護学分野 谷垣 静子

「どうしてその援助をしましたか?」「その(行為の)判断を教えてください」これは、在宅看護学実習で行っているロールプレイの中での私の発言です。看護実践において重要なことは、誰のための看護行為かということです。対象者のことを知らなければ相手に必要な看護とはなりえないのです。対象者と関わり、対象者の「生活」の多くのことを知る必要があると思います。そうすることで、対象者の「生活」に即したアプローチの方法が見つかります。例えば、安全・安楽というキーワードは、対象者の行動を監視することではなく、対象者の自立ということをあわせて考えていくことが大切です。看護師は、対象者が生きていくうえでどのような行動をとれば安全で安楽な行為となるのかをともに考える姿勢が必要です。まさにEBN(Evidence-based practice)です。学生に対し、看護実践のEBP-「つくり」・「つたえ」・「つかう」-を取り入れた授業を心がけていきたいと思っています。



「スマートインフュージョンシステムと従来型ポンプによる業務時間の比較と看護師の意識調査」研究

総合診療棟ICU/CICU 水田 明日香



私事ですが、現在子供を保育園に預けながら日勤のみで働いております。日常生活に育児、仕事と毎日余裕がある生活ではないので、正直研究なんて無理だろうと考えていました。しかし、研究を進める上で看護研究・教育センターへ相談に行き、方向性を見いだせ、やろうという覚悟も見えてきました。実験を行う上では師長やICUスタッフに忙しい業務を工面してもらい、麻酔科医師、業者の方々の協力もあり何とかやり遂げる事ができました。私一人だと無理だったこともたくさんの方の協力で形になり、一つ一つができた時には達成感がありました。

今回研究の機会があり、多くの経験をさせて頂き、それを支えて下さった周囲の方々、そして、家族に感謝したいです。



英語論文の抄読会をしています
★ご参加をお待ちしています★

メンバー：看護師・保健学研究科教員・
薬剤師・医師・歯科医師・学生
場所：中央診療棟5階
卒後研修カンファレンスルーム



第3回
9月26日(金)
開催

【タイトル】 Comparable improvements achieved in chronic obstructive pulmonary disease through pulmonary rehabilitation with and without a structured educational intervention: A randomized controlled trial *Respirology*, 2014 (Impact Factor, 2013 ; 3.495)

【論文の紹介者】 保健学研究科 臨床応用看護学領域 森本美智子

【論文の概要】

COPD患者の呼吸リハビリテーションプログラムに、セルフマネジメントの原理を含む教育を加え、その効果を検討したランダムトライアルである。267名の患者が8週間の教育を加えたエクササイズトレーニング(ET+ED)群あるいはエクササイズトレーニングのみ(ET)群に割り付けられ、介入前後と6か月後、12か月後に調査が行われた。2群はいずれの指標にも同様の改善を示し、違いを認めなかった。

【検討内容】

論理的整合性のある論文であった。2群間に効果の違いは認めなかったが、ET+ED群は、ET群に比べドロップアウト率が少なく、呼吸リハビリテーションプログラムを完遂するには教育的な介入が必要と言えるかもしれない。セルフマネジメント教育については、効果をどのような指標で評価するのか、アウトカム指標に関する課題が残った。



第5回
11月18日(火)
開催

【タイトル】 Helicobacter pylori eradication therapy to prevent gastric cancer in healthy asymptomatic infected individuals: systematic review and meta-analysis of randomized controlled trials *BMJ* 2014;348:g3174 doi: 10.1136/bmj.g3174

【論文の紹介者】 薬剤部 蔵田 靖子

【論文の概要】

ピロリ菌を除菌することが、胃癌発生率の低下に繋がるかを調査したメタ解析である。研究は網羅的に集められ、6つのRCT(ランダム化比較試験)が選ばれ、統合結果が示された。その結果、除菌治療群において1.6%、コントロール群では2.4%に胃癌が発症しており、RR 0.66 (95%CI 0.46-0.95)と有意であった。

【検討内容】

本論文は、網羅的かつ各研究の質について評価されており、読む価値のあるレビューであると言える。プライマリアウトカムである胃癌発生率は、除菌治療により有意な減少を認めたと、胃癌死亡率や全死亡率については、減少していない。2年間というフォローアップ期間は根気のいることであるが、更なるフォローアップ結果を待つべきかもしれない。

